

雜載

療など専らとする盲人も有れ共、右等の藝道を以て大金を取集る事は容易ならず、勿論遊藝は當世盛んに行はる、事にて、弟子々の收納も多く、或は目錄免許與免許杯云て、格別高金を取事也、其外貴人高位又遊興人福有人等に追從して、翫ものと成、金銀衣類を貰ひ、目明もの、稼には、中々得難き程の大金を得るといへ共、併右の貸付利倍の稼には不及、略下

〔病間長語〕今の檢校勾當の類は、みな天朝より賜ること故に、彼等が公侯と抗衡すべきもの、ように思へり、假令これは賜るにもせよ、その職は宛置たき者なり、その制度なき故に、心の欲する所に任て、音曲を業とするもあり、針治を業とするもあり、その内にも性魯なる、何れにもならぬものは、金ぎんを蓄へ、高利を借て、小を積て巨萬を致す、子錢家となるものあり、此等はあまりに制度なきことなり、ねがはしきことは、生業あらしめて、其の外は禁じたきものなり、

〔倭訓栞中編二十六〕もくあみ 俗にもくと誤恐の木阿彌といふは、盲人の名なり、筒井順昭は信長時代の人、卒して三年の間隠し置けり、木阿彌が音聲よく似たるをもて、關所に置て他國敵方の應對せしむ、三年過て、順昭の死を披露せしよりは、本の盲人になりしといふ意なりといへり、〔一話一言〕盲者の死

警者の職、檢校の死を遠行といふ、其餘檢校勾當の死をば永請暇といふよし、塙檢校の物がたりなり、

〔俗耳鼓吹〕すべて京都士大夫の家、慶弔の事ある毎に、盲人多く來て施物をうくる也、朝四つ時前に來りて、四つ時にうけとるといふ、その盲人、鞆町組、傳馬町組とて二組あり、

〔鹽尻十二〕肥前國佐賀近き里に川上と云所有、此地に在る盲者老少となく、皆脇指をさし侍るとなん、里俗の説に、鎮西八郎爲朝九州に在し、日、此村の川に大蛇住て人を取る事久し、爲朝強弓大矢を以て彼蛇を射る、然に其矢蛇を射ぬき、川上明神の森なる楠に立蛇は川底に沈けるを、盲者